

## 第35回

## 第4章 国際社会に生きる日本人としての自覚

## 国際社会に生きる日本人

## 今回学ぶこと

日本人は、第二次世界大戦への反省をもとに、戦後は経済優先の社会を作りあげていった。それに伴って、日本人の価値観も大きく変化していった。その変遷をふり返ってみよう。また、国際化の時代のなかで、私たちは、日本人として思想的な面でどのような国際的貢献が可能なのだろうか。まずは、その前提として、日本人の思想的な特質について考えてみる。さらに、そうした日本人の思想的特質のもつ問題点についても考察し、これから日本人はどのような姿勢で新たな思想を創りあげていくべきかを考えてみる。



講師

田中久文

## ■ 戦後思想の動き ■

戦争への深い反省が、具体的な形をとって現れたのが『日本国憲法』である。そこでは、外に対しては平和主義をうたうとともに、内に向かっては民主主義を掲げた。それは戦後日本社会の基本的な枠組みをなすものである。

しかし、1960年代になると、日本人の価値観がそれまでと大きく変わり、経済優先となる。そして政治的社会的な問題には関心を示さず、自分の家庭だけを大切にしようとする、いわゆる「マイホーム主義」の人たちが増えていった。

さらに現代の日本は、情報化社会が進展し、インターネットの普及が人と人との新たな結びつきを可能にさせた。しかし、それが現実の人間関係を希薄にさせてしまうという問題も生じている。

## ■ 伝統と革新 ■

日本人は、古くから海外の文化や思想を積極的に取り入れようとしてきた。ただし、それらを鵜呑みにしてきたわけではなく、日本的に変質させながら受容してきたのである。

中国から学んだ漢字から、ひらがなやカタカナを作り出したのは典型的な例である。同じように、中国から取り入れた儒教や仏教も、日本的に変容させて取り入れたのである。

国際化の進展のなかで、これからの日本人は、海外の文化を積極的に取り入れる姿勢を変えることなく、しかもそこに日本人独特の工夫を加えることによって、世界に発信

できるような文化を作りあげていくことが可能なはずである。

## ■ ■ 世界の中の日本人 ■ ■

外来の文化や思想を積極的に取り入れるという日本人の姿勢は、しかし、それだけでは、これまでの古い思想と対決することなく、目新しい海外の流行思想に安易に飛びつくということにもなってしまう。その結果、丸山真男まるやま さおのいうように、古い思想と新しい思想とが脈絡なく並ぶ「雑居」ビルのような状況になってしまう危険性がある。

これからの日本人は、海外の文化を積極的に取り入れる姿勢を変えることなく、かといって、古い思想を安易に捨てるのではなく、それを新しい思想とうまくかけ合わせることによって、成熟した「雑種」の思想を創りあげていこうとする姿勢が必要なのではなかろうか。

また、日本人は海外の文物、いわばモノに関しては寛容であるが、海外からのヒトに関してはそれほど寛容とはいえない面がある。これからの私たちは、海外の異文化の人間に対しても包容力をもった社会を作っていかなければならないであろう。

### ◇ コラム ◇

現代の日本の社会を「無縁社会」とよんだりします。この「無縁」という言葉は、古くは地縁・血縁から抜け出て自由になるという意味で肯定的に使われる場合が多かったのです。しかし、現代では、若者が社会との関係を断って「引きこもり」になったり、一人住まいの高齢者が亡くなくても長い間誰にも気づかれなかったりといった、否定的な意味で使われています。

日本の社会は、伝統的に人との強い絆で結ばれてきました。しかし、今そうしたものが急速に失われています。これからの私たちは、人との新しい絆を普段から苦心して作り上げていかなければならない時代を生きているといえるでしょう。